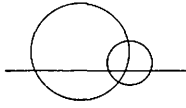


〔論文〕



東亜同文書院生が記録した 1910 年代の内蒙古東部の地域像

東亜同文書院大学記念センター
リサーチアシスタント 高木秀和

I はじめに

本論の目的は、上海にあった東亜同文書院の在學生が書き残した「大旅行」記録のうち、第 15 期と第 18 期の学生たちの作品を用いながら、1910 年代（具体的には 1917 年と 1920 年）の内蒙古東部の地域像を描き出すことである。

近年のオープンリサーチセンター事業により、「大旅行」研究も着実に進みつつあるといえる。たとえば、藤田佳久は自身によるこれまでの「大旅行」研究の蓄積を用いて、書院生たちの「大旅行」記録のもつ意義や価値をまとめているし（藤田 2007・2009 および 2002）⁽¹⁾、「農地開発」という観点からおもに満州事変以前の満州の地域像を「大旅行」記録をもとに明らかにする研究も行っている（藤田 2008）⁽²⁾。また、暁敏（2008）は内蒙古フルンボイルを巡検した書院生たちの「大旅行」記録をいくつか読み進め、それらの特徴と意

義を考察している⁽³⁾。筆者も 1908 年（高木 2007）⁽⁴⁾と 1910 年（高木 2008）⁽⁵⁾に内蒙古の包頭・帰化城（フフホト）間とその周辺を巡検した書院生の「大旅行」記録を用いて、地域の特徴と 2 つの作品の間にみられる相違を検討した。その他、オープンリサーチセンター事業には直接関係しないが、藤田佳久（2005）は愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）環境グループの調査で訪れた山西省における土地利用などの地域の特徴を、書院生たちの「大旅行」記録と比較している⁽⁶⁾。

先述したとおり、筆者はこれまで「大旅行」記録を用いておもに内蒙古中西部地域の地域像を検討してきたが、内蒙古東部地域の検討は行っていなかった。筆者は今後も書院生たちの手による「大旅行」記録を読み続けようと考えているので、本論では研究対象地域に幅を持たせる意味で 1910 年代に内蒙古東部を巡検した書院生たちによる記録を読むことにし（図 1）⁽⁷⁾、将来的には 1920 年

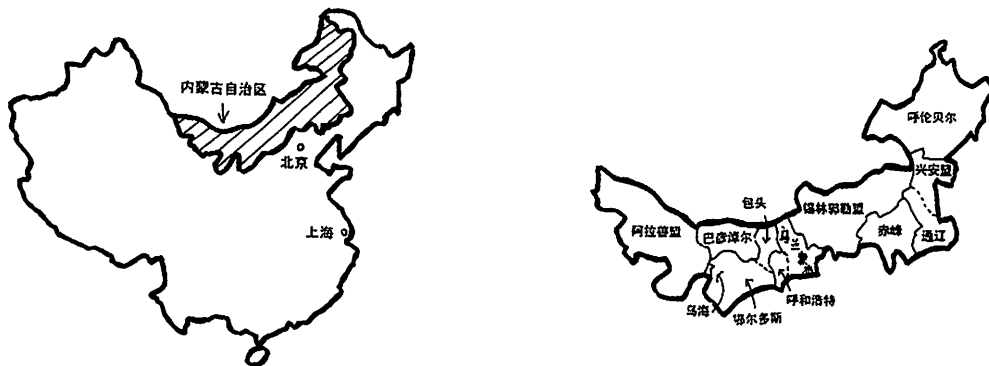


図 1 内蒙古自治区の位置と自治区内の行政区分
（行政区分図は『走遍中国 内蒙古』挿図をトレースして作成）

代以降の内蒙古中西部・東部地域の記録と比較検討し、同地域の地域変容を考察していきたい⁽⁸⁾。

なお本研究では、愛知大学がオンデマンド出版した『東亜同文書院大旅行誌』の第11巻『利渉大川』のうち「内蒙古の旅」⁽⁹⁾と、第13巻『粵射隴游』のうち「興安騎行」⁽¹⁰⁾を定本として用いることにし、それらの本文を引用する際には基本的に旧字体を新字体に改めることにする。また、それらからの引用が多くなるので、引用部分を「」で示し、ページ数をその直後の()で明示するかたちをとる。

Ⅱ 第15期生による「内蒙古の旅」と 第18期生による「興安騎行」について

本章では、本論の検討で用いる2つの「大旅行」記録の概要と、班員たちの経歴などを整理することにする。

(1) 第15期生による「内蒙古の旅」について

古川清行氏が記した「第十五期生の回想」⁽¹¹⁾によると、彼らは1915年(大正4)の夏にハスケル路の仮校舎に入学した。この年は5月に日本が中国に対し二十一か条要求を突きつけた年でもあり対日感情の悪化もみられたが、上陸した上海は「白人、黒人、そして支那勢力がウヨウヨする」⁽¹²⁾街で、国際都市であることを実感したようだった。彼らは中国語の習得をはじめ書院での学習に勤しむ一方、武道をはじめとする部活動や寮での飲食会(通称「寮廻り」)が頻繁に行われ文武両面で学生生活を満喫していたが、ハスケル路校舎の時代は「校内が極めて不潔であつたので、(筆者注・腸チフスなどの)病菌などはびこり、身体の弱い者は犯されたら再起出来なかつた」とあるように病気で亡くなる学生も少なくなかった⁽¹³⁾。翌年、虹橋路校舎が完成し、書院は移転した。

さて、彼らは2年次を終えた1917年(大正6)の6月末に「大旅行」に挑んだ。「内蒙古の旅」を記した「内蒙古班」は、濱田唯喜、大塚一郎、

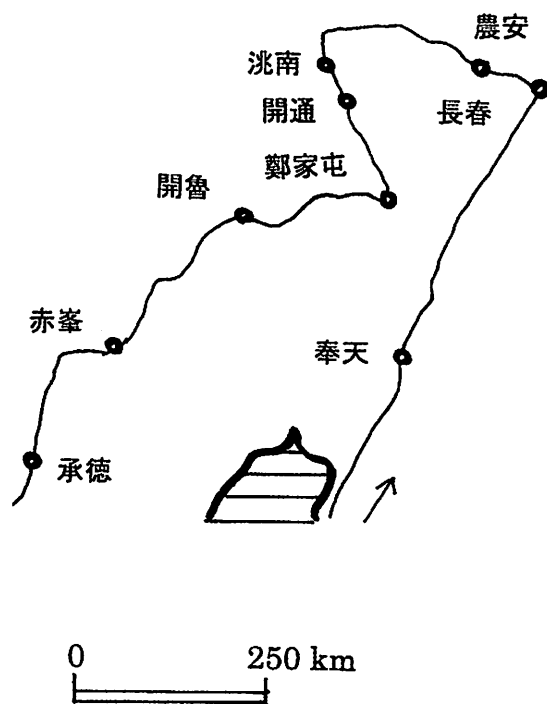


図2 第15期「内蒙古班」の行程図
(藤田(2008)挿図をトレースして作成)

良川栄作、篠岡規矩夫、正橋治七郎の5名で構成され、コース上の主要都市のみを書き抜けば、上海—大連—奉天—長春—洮南—遼源(鄭家屯)—開魯—赤峰—熱河—北京—天津を約2ヶ月半かけて巡るものであった⁽¹⁴⁾。コース図は図2に示した。なお、滬友会が創立80周年を記念して編んだ『東亜同文書院大学史』には、各期生の卒業後の足取りをまとめた「銘々伝」が収録されているが、そのなかに濱田、良川、篠岡、正橋各氏の経歴がまとめられている⁽¹⁵⁾。濱田氏は熊本県出身で、三菱商事などを経て横浜日新運輸倉庫取締役役に就任、良川氏は石川県出身で、大連民生署や関東局学務課で勤務し、戦後は金沢の公民館の主事を務めた。篠岡氏は岡山県出身で、三井物産に入社し漢口支店長などを歴任、正橋氏は富山県出身で外地の鉱業所を経て、戦後は日本経営技術協会に所属した⁽¹⁶⁾。

彼らが記した「内蒙古の旅」は、『利渉大川』の209頁から239頁に収録されている。その他、本文の前には集合写真およびスナップ写真が4頁分、コースの略図などが1頁分あり、巻末には「内

「蒙古班旅行経過表」と題し、コース上の概況をまとめた表が2頁強にわたり掲載されている。「内蒙古班旅行経過表」は、通過地点の道路状況や使用されている主食、言語などが一覧表の形式でまとめられており、当地域の地域性の解明のための有益な情報を与えてくれるものである。このデータを、IV章の検討に用いることにする。

(2) 第18期生による「興安騎行」について

藤野進氏が記した「春秋三十五年（第十八期生の記録）」によると⁽¹⁷⁾、彼らは1918年（大正7）の夏に虹橋路校舎に入学した。再び「第十五期生の記録」を引けば、当時は1914年に勃発した第一次世界大戦のさなかであり、「日本の貿易は繁栄し、（中略）大正七・八年は好景気の絶頂で」あったが、「九年に至り（中略）欧州からの注文は杜絶し商品は暴落するいつぼうであつたから内地の経済界は混乱した」⁽¹⁸⁾とあるように、彼らの在学中は日本にとっても激動期であった。そのような時期でありながらも書院での生活は充実していたようであり、「この学校は、先輩が親切でやさしく、同志愛の結合のうちにとけてゆくことが嬉しかった」⁽¹⁹⁾と述べているように、同窓の書院生同士の関係は深かった。それは寮での同部屋の関係であつたり、「県人会」と称する同郷者の関係であつたり（頻繁に飲食会を開催したり、課外時間には出身県の先輩より中国語を教わった）、部活動での仲間関係であつたり、またそれらを超えた関係もあつたと考えられる。

さて、彼らは1920年（大正9）に「大旅行」を行ったが、「興安騎行」を編んだ「内蒙古班」は7月初めに大連に向けて出発した。「興安騎行」の序文によれば、彼らは当初「黒竜江の航運を調査する目的であつたが、昨冬以来西伯リアの形勢は急転直下して赤化軍の蹂躪する処となつた。（中略）その結果として新たにこの内蒙古班が生れたのだ」とあるように、コースの変更を余儀なくされたが、「実際に於て我々はこの黒竜江線より

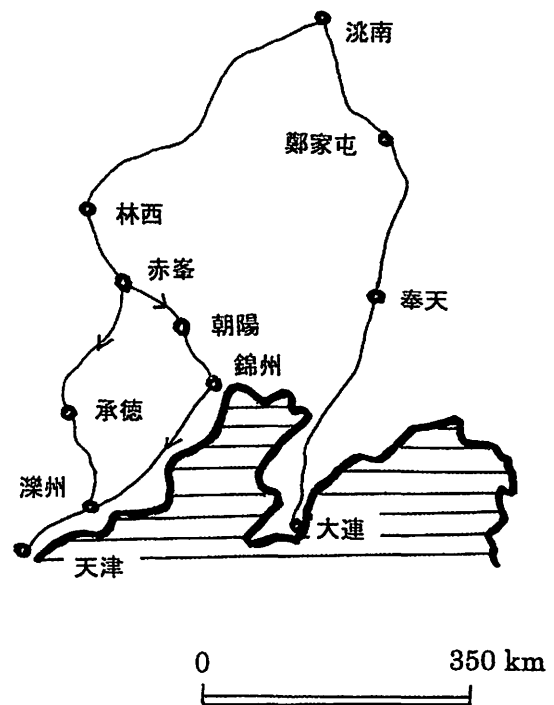


図3 第18期「内蒙古班」の行程図
（巻末の折り込み地図をトレースして作成）

も内蒙古線を望んで居つたのである。誰れも不^(ママ)腹をいふものはない」⁽²⁰⁾とあるように、内蒙古へのコース変更をむしろ歓迎している。調査コースは、約3ヶ月をかけて上海—大連—奉天—遼源（鄭家屯）—洮南—林西—赤峰—熱河—北京—天津を巡るものであり、第15期「内蒙古班」の辿ったコースに似ている⁽²¹⁾。コース図は図3のとおりである。班員は当初5名の予定であつたが、班長の市橋氏が病気のために帰国し、湯畑爆弾（正一）、原田慶二、草野松雄、實吉公望の各氏でスタートした⁽²²⁾。彼らの経歴が前出の「銘々録」にまとめられているのでそれを引用すると、湯畑氏は福岡県出身で外務省を経て新聞界に入り、終戦前には満州新聞界の重鎮となったが、戦後日本で病没したといい、原田氏は鹿児島県出身で東京電燈、華北電業を経て、終戦後は日本で農業経営に着手した。草野氏は山口県出身で外務省に入省し満州各地の公館に勤務したが、その後鉱山開発などを経て戦後は法務省入国管理庁に勤務し、實吉氏は鹿児島県出身で大阪府立貿易館の分館長などを経て

ジャカルタ経済局長の座に就いた。なお、帰国した市橋太郎氏は新潟県出身で、大日本製糖大連支社、大連永順洋行、ハルピン大北新報社に勤務した⁽²³⁾。彼らの出身地をみると、帰国した市橋氏以外は九州および山口県出身であり、同郷の好でこの班を結成したとも考えることができ、書院生たちの関係を考えるうえで大変興味深い。第15期の「内蒙古班」も、判明した範囲では北陸地方出身者を中心に西日本出身者で構成されていることが分かる。すべての班のメンバーの出身地や人間関係を確認しなければ断定できないが、長旅をとにもするには出身地が近かったり気心が知れているなど、調査班の結成には関心を持っているテーマや地域が似ていることだけではなく、人間関係が重要だったのではないかと考えられる。

彼らが編んだ「興安騎行」は、『粵射隴游』の211頁から264頁に収録され、本文とは別にコースの略図などが1頁分、集合写真およびスナップ写真が4頁分ある。なお、同書の目次には「興安騎行」のタイトルとともに「羊毛調査班」と班名が記載されており⁽²⁴⁾、巻末にも「羊毛調査班」の旅行経過表が収録されているが、辿ったコース上の地名を確認すると先に示した地名とは異なっており、明らかに別のルートとなっている⁽²⁵⁾。同書のなかには巻末に記載されたルートを辿った班の記録は収録されておらず、不明な点が多い。

Ⅲ 第15期生による「内蒙古の旅」からみた内蒙古東部地域の地域像

本章では、第15期生による「内蒙古の旅」の記述内容をもとに、内蒙古東部地域の地域像を描いてみることにしたい。はじめにこの作品の章立てを確認することにする。

内蒙古の旅 青島 大連 奉天 長春 密門農
安 伏龍泉に 長嶺縣城 六十七抗拉 邊晤^(ママ)
杜家店 洮南 開魯 開魯奈曼王府迄 奈曼王府
より下窪迄 下窪より赤峰迄 赤峰出発 行路難
北京行き 珍客来了 解散日⁽²⁶⁾

まず、「内蒙古の旅」というこの作品の表題名を節のタイトルにした序文から始まる。なかで注目されるのは、「人の子は驚かざれば墮落するばかりである、文明は人の末梢神経を磨し銷して針よりも鋭くする、驚かんとは末梢神経の驚を求めん為ではない根底に横はる我を動かして新らしき自己を新らしき心の上に樹立せんとする事である。(中略)夏とは曰へど千草八千草の花咲き狂ふ北の国は今尚ほ隆々の肉塊に弦月の刀を薄と乱して裸馬に千里を馳る漠北の民が住むといふ。氷を凌ぐ井水の冷きを掬んで大空と共に消ゆる地平線の圓きを眺め驚きの裡に古き我が塵衣を蟬脱せんとして一行五人神戸丸の甲板に上る。」(210頁)という文句であり、まだ見ぬ内蒙古の地に思いを馳せ、そこを旅することにより得られる「驚き」を得ることにより新たな自己を確立したいとする若人の心情を察することができる。「大旅行」は書院生活のクライマックスであり、卒業論文執筆の旅でもあるが、学生の身分から卒業後日中の架け橋となり活躍しようとする社会人の身分へと過渡する際の通過儀礼にあたるととらえることもできる。

さて、彼らは6月25日に上海を出航し、青島経由で大連に至った。彼らは青島と大連の比較をしている。青島は美しい街であるとし、「山あり水あり遠浅の海には玩具の様な色彩とり、の小屋を砂原に建て、脱衣場とす海水浴の便は致れりである。(中略)風光明嬌、食道楽、遊道楽の要素は悉く備はる」(211頁)とし、まるで地上の楽園のように表現している。一方、大連の波止場は大規模で立派なものであるが、臨海部の倉庫は風雨に曝されて傷んでおり、「青島に比すれば美醜の差豈月鼈のみならんや」(212頁)と評しているものの、街に入れば都市計画により放射状に街区が整備されており、そのうえ日本人も多いので「故郷に帰った様に思はせる処である」(213頁)と述べ、「大連はよい所」(213頁)という感想を述べている(写真1)。また背後に禿山がみられる

風景に故郷のイメージを重ね合わせており、彼らにとって心休まる場所だったのではないかと推察される。

続いて奉天を訪れ、「奉天新市街は南満鉄道敷設の為出来かゝりの日本人町である」(213 頁)とし、道路を軸に都市が整備されている状況に感心している。彼らはここでも街の比較をしており、「清朝の旧都瀋陽とは(中略)雨が降れば足音五寸は泥の中に埋れる風が吹けば表皮の上に三分は砂が積もる」(214 頁)と描写し、瀋陽における道路(路面)の未整備を嘆いている。宮城(すなわち瀋陽故宮)や郊外の北陵も訪れているが、そのうち宮城(写真 2)は「総ては時の威力に破壊されて廃残の色は破壁に掛る土蜘蛛の網の糸にも表はれる」(215 頁)と述べ、過去の栄華を偲び荒廃している現状を哀れんでいる。一方、



写真 1 大連の「南山風情街」は日本人町だった(2006 年、筆者撮影)
現在は整備が進み、観光客相手の露店もみられる。



写真 2 瀋陽故宮(2006 年、筆者撮影)

北陵に至る道沿いには田園風景が広がり、陵は「老松の森」(215 頁)に佇んでいるという。

奉天を発つとき、班員の正橋氏が赤痢に倒れ、ここからは 4 人で旅路を行くことになった。夜汽車に乗り長春を目指した。長春は上海や大連に比べれば貧弱にみえたが、「辺境に近くなるだけ町の気色に別段の異りがある。看板も多くは露語が加へてあり到る所に露国人と相逢ひ露人の酒場と突き当る若ひ醜くい露国の女が二三人も入口に腰かけて縫ひものをしている」(216 頁)と述べ、ロシア人が街に入り込んで来ている状況を説明している。当時、長春はロシアの東清鉄道の起点であった。

彼らは長春より密門まで、その東清鉄道を利用して移動した。「密門駅には露兵が充満している」(217 頁)が、日本人経営の旅館があり、そこで日本酒や魚や米の飯を楽しんだ。船や汽車を使った旅はここまでであり、ここからは厳しい陸行が始まり、どんなものが待っているか分からないという意味で、気持ちに区切りをつけた夜でもあった。

さて、陸行の行程ではまず農安を目指すことになる。5頭の馬に伴われながら移動することになったが、「道は次第に悪くなる果は田か道が分らぬ」(217 頁)ありさまだった。そのような悪路を苦勞しながら進むと、農安のシルエットが見え始めた。街の出入口には図 4 のような「下が細ふて

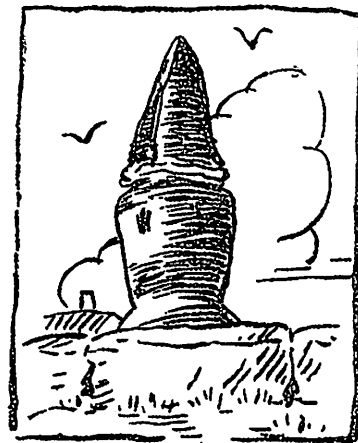


図 4 農安の土塔(第 15 期「内蒙古の旅」より)

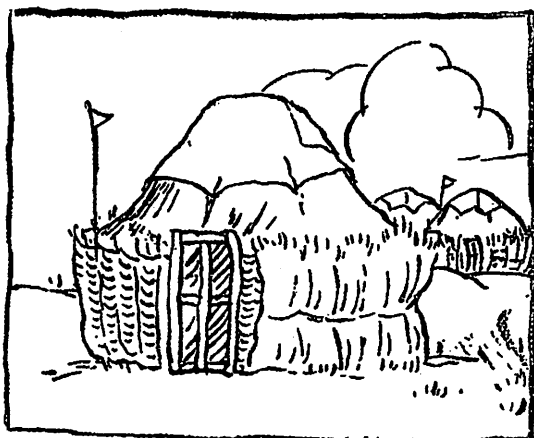


図5 蒙古包（第15期「内蒙古の旅」より）

上になる程太くなる朝鮮人が作成した」（218頁）土塔がみられた。

農安出発後も悪路が続き、果てしはない草原が続くが疲労が蓄積されているせいか彼らに「何等の感触も、印象ももたらさ」（218頁）なかった。その後、伏龍泉、長嶺縣城、小村落である六十七抗拉、邊昭（邊晤）、杜家店を経て洮南に至った（図5）。途中、伏龍泉・長嶺縣城間では突然夕立に遭い、砂嵐とにわか雨を経験した。

そんな苦難と夏の暑さのなかで旅を続ける彼らにとり、洮南はユートピアに感じられたのだろう。ここでは林大尉らの歓待を受け、水を得た蛙のように生き返ったようだった。だが、ここでも災難は待ち受けており、「夏季は何時雨期に入るや分らない」と述べているように「烈風豪雨」や「風雨」に遭遇し、「林大尉の庭は一面に深さ五寸の小池が出来た」（以上221頁）。晴天を待って洮南を出発したが、平原は一面の湖と化しており、「馬自身の脚さへ自由にならぬ泥」（222頁）であった（写真3）⁽²⁷⁾。遼河を渡るあたりから「四方の景色も一変した森もある林も見へる平原は平原でも森に陰され林に遮られて一望無涯の看はない、景色の変りは鄭家屯に近^(ママ)ずいた為であらう、田も畑も彼所、此所と見へて来る鄭家屯は更に近ひに違ない」（222頁）と描写し、鄭家屯に近づきつつあることを実感したようだった。川に近いことから、



写真3 行路難（第15期「内蒙古の旅」より）



写真4 鄭家屯市街（第15期「内蒙古の旅」より）

田畑などがみられるのだろう。書院卒業生も在住する鄭家屯（写真4）に到着すると領事館やホテルの日本人から歓待を受け、楽しい日々を過ごしたが、赤痢に罹った班員の正橋氏に続き篠岡氏が豪雨に当たったため体調を崩し、ここで脱落することになってしまった。書院先輩の高久氏らに見送られて鄭家屯を出発後も雨上がりの悪路というコンディションは変わらず、「水たまり多く（中略）水あるごとに深さはかり浅い所を撰んで渡った」（224頁）ほどであった。清河の渡船も増水のため、割増料金を請求された。

こればかりではなく、彼らにはもっと大きな災難が待ち構えていた。大罕という集落で清河の氾濫に見舞われたのである。月夜の晩であった。集落に入り込んできた水はじょじょにそのかさが増し、浸水防止のために作った「店の門前の防止壁はわけなく破壊し」（224頁）た。そして「九時頃には水深腰に及んだ。元来土で造つた支那家水にもろいこと予想の外」（224頁）であり、土で



写真5 前大汗の洪水筏にて難を逃る
(第15期「内蒙古の旅」より)

出来た建物は無残にも崩壊し始めた。住民たちの恐怖は最高潮に達し、「男等は破壊した家の屋根の上で炬火をたいて神に祈る女小^(ママ)供等は恐ろしさに泣き叫が院子には水に溺れた豚が悲鳴をあげる家の倒れる音濁水滔々として流る、音と相和して惨憺たる修羅の巷を現出した」(224-225頁)。午後10時には彼らも死を覚悟し始め、「流れくる材木を集めて筏をく」み、夜が明けて一面水没した光景を確認し、白音他拉⁽²⁸⁾を目指し「三人は筏にすがつて滔々たる濁流を上流に溯つた」(以上225頁)のであった(写真5)。

ようやく辿り着いた白音他拉では、日光洋行の添田氏や都督府の囑託でこの地域を調査中の書院先輩・宮崎吉蔵らから歓待を受けた。「白音他拉は蒙古王所有の地を払下げ市街を作りたるもので開市以来日猶浅いので市街も比較清潔で清頓し住心地のよい所である」(226頁)ためか、しばらく滞在した。白音他拉を出発しても「遼河を渡れば前面の水畑地、を没し海の如く」(226頁)という状況であった。再びに夕立に見舞われモリン廟に到着したが、ここにいるラマ僧1500人のうち、3人を除き「みな無学文盲蒙古語さへかけるものは二十人を出」(226-227頁)ず、衛生環境も芳しいものではなかった。

つぎに訪れた開魯縣城は、「民国四年蒙匪の爲めに家は焼かれ財は奪はれあらゆる惨虐を蒙つてから衛兵の数も多くなつた」という。出発の際、荷車を手に入れようとしたが「遼河氾濫の爲め荷

物を運ぶ車がな」く、「馬を買ひ度かつたが金がなかつた」ため驢馬と「箱馬」(彼らによる命名。腰の辺りが「四角になつて恰度箱の様であるが故」。)を入手した(以上228頁)。

開魯から奈曼王府までは砂山が続いた。夏の太陽、熱い砂、蒙古包に近づくはるか手前から臭いを嗅ぎつける猙獰な蒙古犬との遭遇から、「前大罕の大洪水に決死の覚悟をした時と開魯から奈曼王府に迷ひ進んだ時とが僕等の旅行の一番苦しい時で同時に一番思出の深い時であつた」(229頁)と後に振り返っている。そのようななか、乳や茶でもてなしてくれる「相貌に似合はぬ親切な蒙古人」(229頁)、放牧の様子、そして「殺風景な蒙古の原」(230頁)に咲く「美しい蒙古の草花とは幸に僕等をして蒙古の土地に醜い残骸を曝さしめなかつた」(229頁)。ところで、どうして砂漠で放牧かという疑問を抱くが、「砂漠地帯とはいへ時には青々とした草の丘も通る事がある、細い柳にかこまれた涼しい沼を見る事もあるそうした丘と沼には必ず五十位ひから百二百位ひの牛や馬が放牧せられて居る」といい(写真6)、夕暮れ時に家畜を管理する汚れない牧童の姿と同行の宮崎氏が歌う「蒙古の哀調」の歌声(以上231頁)からノスタルジーに浸っている。

砂漠と蒙古犬に苦しみながらも、蒙古人のもてなしと遊牧風景に心を癒されながら奈曼王府に到着した。ここは王府といいながらも、「大した

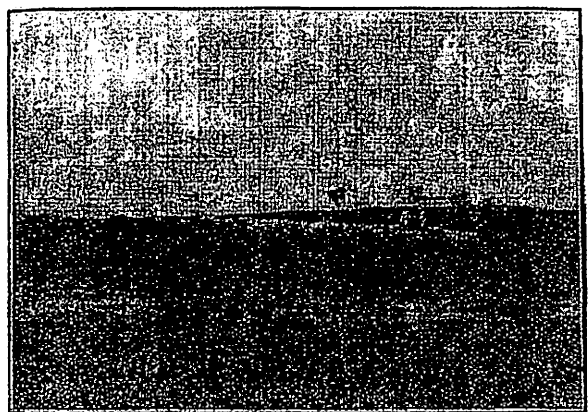


写真6 牧羊(蒙古)
(第15期「内蒙古の旅」より)

王城のある筈がない、王様といつても大した尊厳の威を認める訳にもいかなかった」(233頁)が、王より馬(と思われる)4頭と護兵が与えられた。王府から下窪までは一変して、「殆ど甘草ばかりがとも思はれる野」(233頁)であった。下窪では秦和隆氏宅に泊まった。ここでは、同行の宮崎氏との別れが待っており、同氏は小庫倫方面を、班員たちは赤峰をそれぞれ目指すことになった。

下窪から赤峰までの道のりは、王子廟、海力王府などを経るものであった。王子廟では、蒙古人を苛めている建平縣の知事に怒りを覚え、「馬賊の出没の為め危険」のため「予定線を南にはづれて」(以上234頁)海力王府を経過することになった。「海力王爺は(中略)年齢僅かに二十五とか六とか其の容姿の端麗なる言行の優れたる僕等旅行中に合つた王様の内第一であつた」(234頁)という感想をもらしている。無事に到着した赤峰の街は「老榆の陰に隠れて涼しさう」(235頁)であり、北條領事以下何人かの日本人に会い、親切な対応を受けている。

赤峰出発は9月1日であり、この「大旅行」も終わりが近づいてきた。赤峰からは、「山岳起伏し、「石道多く加ふるに山路急坂沙漠」(以上235頁)であり、平原と山岳というこの地域の地形のコントラストに、旅する者として嫌気を感じたようだった。

赤峰を過ぎても山道の起伏が続いた。途中の村で巡業の村芝居を鑑賞したり、隆化縣城の知事を訪問したりしている。本多熱河でも知事を訪問し彼の歓待を受けた。知事の護兵に伴われて宮殿を拝観したが、「榮華を極めたることもことあらん離宮は今やその主なきにあればと、すたるがまゝにすたれゆく」(237頁)という状況だった。またこの「付近松樹多く廟の黄瓦緑甍と相反映して美観を極む」(236頁)とし、美しい街の景観に目を奪われている。縣城を出発後、これまでの旅路で出会わなかった西洋人7人の一行と会ったり、万里の長城が視界に飛び込むようになり

と、北京に近づきつつあることを実感した。

北京には9月10日到着し、人力車を借りて日本公使館を訪問したり、先輩西田氏と面会している。その日の夕方、入浴した。旅の疲れと垢を落とし、長かった「大旅行」が終わった。

その後、北京を散策した。天津経由で日本へ帰る者、北京に留まる者に分かれ、彼らは10月初旬に上海の東亜同文書院で再会した。

IV 第18期生による「興安騎行」からみた 内蒙古東部地域の地域像

本章では、第18期生による「興安騎行」の記述内容をもとに、内蒙古東部地域の地域像を描きたい。前章と同様、はじめにこの作品の章立てを確認する。

(序文) 大連への夜逃げ 先輩泣せ 張作霖 支那人の寝言 日本人臭い 畳上の昼寝 驢馬の恐水病 三大強敵 大豪雨来る 蒙古犬と格闘 月下の行 豆の悩み 洮南入り 乗馬術の速成 決別の痛み 興安嶺さして 馬を立つ興安の第一峯 神州男子の意気 炒米 図什業図王府 草原行 喇嘛坊主と羊の丸煮 仁丹の威力 暴虐なる支那行商人 牛奶餅の味 蒙古人の親切 蒙古包 蒙古ぜんざい 支那人の歓待 医学博士 雨の中の大格闘 蒙古美人 沙原行 蒙古杏 見事な落馬 成吉斯汗鍋 喇嘛坊主と梅毒 大糞山 仙境に遊ぶ 馬賊と命の保証 天鬼と川獺 蒙古奇習 雨乞ひ パブチャツプの古戦場 林西の天主堂 馬殺し 月下渡河 男の意気!! 天長節 気絶!! 馬の遭難 病床 四分五裂 独り上海へ!!

以上は湯畑氏が記したのだが、彼は赤峰で病臥に伏してしまった。そこで、湯畑氏にかわり實吉氏が「その後の旅」というタイトルで「大旅行」記録の続きを書いている。

滦河に浮んで 断崖を仰いで長城を見に 身は関内に入る舟は滦州へ急ぐ 上海を慕つて

さらに、原田氏は「蒙古旅行に就て」という一文も寄せている。

(まず蒙古旅行の注意点等を述べる表題がない節がある) 蒙古人の性格風習に付きて 日本人に対する観念 家族^(ママ) 干係 服装⁽²⁹⁾

章立ての紹介が長くなってしまったが、さっそく内容を確認していきたい。なお、ここでは「大旅行ルート」に沿って記述している湯畑、實吉両氏の作品をみていくことにし、原田氏の作品は次章の分析で用いることにしたい。

前章2節でも紹介したとおり、この班は当初予定していたルートが変更となり、内蒙古を巡ることになった。また、いま述べた湯畑氏のほか、草野氏も洮南で脱落してしまい、最終的には原田氏と實吉氏のみで「大旅行」を続けた。

彼らは7月9日の夜、「頭には印度人によく似合ふパナマ帽をかぶり、足には兵隊さんの様に巻きゲートルを巻きつけ肩からは水筒雑糞といふ出立ち」(211頁)で、船に乗り大連を目指した。大連では書院先輩らに迎えられ、満鉄本社調査課を訪ねて羊毛皮調査関係の調査書を収集した。

奉天では「丁度張作霖が出兵の準備時であったので市街は何となく殺気立つて居た」(212頁)ので、南満医学堂や旧宮などを足早に見学して公主嶺に向かう汽車に乗った。「日本人臭い! この満州へ来てといふものはどこに行つても日本人ばかりだ。まるで日本に帰つた様な気がする」(213頁)と述べ、日本人と出会うと郷愁を感じる第15期の班員とは異なった印象を抱いている。公主嶺では、満鉄の農事試験場を訪問し、羊を見学した。

つぎに鄭家屯を目指した。ここでは15期生も利用した鄭家屯ホテルに入った。到着時、雨が降っていて、さっそくひどい泥濘に遭遇している。ここからの行程は陸行となるため、馬1頭、驢馬2頭、案内人兼蒙古語通訳1名(王氏)を雇った。

鄭家屯を出発すると、雨季に当たっていたためルート上の「到る処に湖が出来て居」り、驢馬は「水を恐れること甚だし。水の中には決して入らぬ」(以上214頁)ため苦労した。また、「奥地

の「三大強敵」として、南京虫、蒼蠅、「この暑さに土間の下から又々熱を送られてはとてもやりきれぬ」(以上215頁)支那宿の炕を挙げている。伏虎屯、勃兒山を過ぎると「山一つなく大海原の上を歩む様な気がする」というが、「道路は依然として泥濘だ。否、泥濘の度を通り越して居」(以上215頁)り、ついに禪姿で移動することになった。

哈拉毛頭出発後も依然として泥濘の道は続いたが、突如雷雨に見舞われた。偶然にも家を見つけたがそれが流されるほどになり、暴風雨のなか衙門台を目指した。「水は腰まであ」(216頁)ったという。

太平鎮を目指す道中、蒙古犬に遭遇した。「毛色はあくまで黒く、体の大きさは子牛程もある奴が牙をむき出しして将に背にとびかからんとして居」(216頁)た。そんな蒙古犬の群れに、筆者の湯畑氏は勇敢にも棍棒を持って応戦した。その後、太平鎮、邊昭、開通縣城を辿り、「天地の雄大さに打たれつゝ、」(218頁)洮南を目指した。足裏一面にマメが出来たので、通りかかった洮南に向かう馬車に乗せてもらった。

洮南は「東蒙第一の市街」で「人口三万を越え」、「上海等にある馬車と変りはない」(以上218頁)馬車が市街を走っている(写真7)。ここでは日本人2名に歓待を受けた。洮南・林西間の旅は「食物がつかぬ」、「馬賊の出没がことに盛ん」なために危険視されたが、彼らは「當つてくだけろ!」(以上219頁)の精神で進むことに決めた。むしろ彼らにとりそれらより恐ろしいものは雨であった。また、「この地方では馬の安いことは有名」



写真7 洮南府(第18期「興安騎行」より)

で、「有り金すべて出して馬を買ふた。その外にロバ一匹を留下した」(以上 219 頁)。そして、馬を乗りこなすために稽古を行った。先述のとおり、残念なことに草野氏が病気のためリタイアした。

洮南を発ってしばらくすると山が見えてきた。「興安嶺の麓」(220 頁) だといい、水泉兒より山道になった。突泉縣城では知事を訪問し、歓迎を受けた。縣城とはいえ、「先年蒙匪の為に市街を全滅せられ、今出来て居るものはその後に来たもので」、「縣設置委員として王仲高氏が全部の支配をして居る」(以上 221 頁) という。王氏からも先の 2 つの理由により、ここから先に進むのを拒まれたが、それでも彼らは前進した。

図什業図では、日本人にはとても食べられるものではない「粟粒を油で炒つた(中略) 堅いことは石の様」(222 頁) な「炒米」が出された。のちに、「炒米と砂糖でぜんざいをつくつた」り、「炒米に新しい牛乳をかけて食ふと全く菓子の様」(以上 228 頁) という記述があるように、彼らなりに工夫してそれを食べるようになった。到着翌日、王府を訪問したが王は不在とのことであった。王府は「後に山を負ふて前面に広い平原を持つて居」り、「四囲は白壁で囲であり、門前には三本、マストの様な高い木が立て、ある」という「立派」(以上 223 頁) なものであった。

王府出発後、道は山道から草原に変わったが、再び山道となった。彼らは蒙古人の乗馬術に驚いた様子だった。バインヨシホ廟ではラマ僧の厚遇に与かり、「味は何もない」「羊の丸煮」と「酸味を帯びて居る」「牛乳」を食した。外に出ると、「天幕を張りたる支那行商人あり」、「酒に眼がない」ラマ僧や蒙古人に「酒と羊の皮とを交換して商売するとのことである」(以上 224 頁) が、「蒙古人はすぐに誤魔化されてしまふ。銭のない時は掛けで飲ます。人の好い蒙古人は掛けのたまるのも知らず知らずに飲む。この代償として過大な要求をする」(225 頁) らしく、彼らは行商人の商売方法に否定的なまなざしを向けた。

廟を出発すると立派な平坦な道が続いた。その日の宿泊地のガハイトでは、瓶に保存しておいた牛乳の底の部分にたまった「牛奶餅」と呼ばれる乳製品を食した。この上に出来たものを「奶豆腐」といい、さらに上にはまだ固まっていない液状のものがあるという。牛奶餅は酸っぱく、彼らの口には合わないようだった。その夜、泊めてもらった家の家族は外に寝、班員たちは家のなかで寝かせてもらった。「蒙古人の親切、素朴な気風は支那人と全く反対である」(226 頁) と評している。昨日、汚い商売をやっていた行商人をみただけに、蒙古人の対応には目を見張るものがあつたのだろう。翌日、山道を行き東札魯特王府を訪ねて宿の交渉をしたがあっさり断られたため、付近の蒙古人の集落に宿をとった。そこで彼らは初めて蒙古包に泊まったが、ここでも蒙古人の親切に心を打たれている。胡弓(馬頭琴か)の音色と雄大な景色に哀愁の念を抱くとともに、「『思へば遠く来つるかな嗚呼』」(227 頁) と、ゆったりとした気分のなかで、はるばる蒙古の地にやってきたことを実感した。

西札魯特王府では「支那人の歓待」(節の表題)を受けた。鄭家屯で焼酒屋を經營し蒙古に通じている菊竹實藏氏より、ここに住む人に宛てた紹介状を貰ってきていたからである。彼は不在だったが、その紹介状をみた友人が歓待してくれた。不在の彼が菊竹氏の店で世話になっており、「時々鄭家屯方面に物品を仕入れに行く」(228 頁) ということである。この逸話から、当時の經濟活動の範囲の広範さを垣間見ることが出来る。

西札魯特王府を出発すると再び山道である。蒙古包に泊まったナイミンコウケンを出ると「灌木も生ひ茂り所々に深さの知れぬ峡谷がある」(230 頁)。昨日も一時的な豪雨に見舞われたが、この日も天気がぐずついた。途中、蒙古犬の集団に遭遇して悪戦苦闘した。宿を借りた包には絶世の「蒙古美人」(節の表題)がおり、「天花粉」(おしろい)かと石鹸を与えた。

この集落を出発すると辺りは砂原に変わった。彼らはそのようななかにぽつんとあるアルコルチン王府に驚いた。ここにも羊群とラマ廟がみられた。王府を出てしばらく進むと再び山道となったが、この付近の山と平原一帯にはアンズ畑が広がっていた。「この杏から油を取るのだ」そうで、「これまでも蒙古人の家 この実を乾して居るのを見たことがある。蒙古人唯一の燈の原料」(「野生して居る」、以上 232 頁) になるということである。

そのアンズ畑を抜けると平坦な道が続いた。ヤーメン廟は前面が平原だが、背後に山を背負っており、平原には河が流れていた。ここには「羊の丸煮をやる」「成吉思汗鍋といふ大鍋がある」(以上 233 頁) ことを事前に聞いていたようだが、彼らがみたものは聞いていたものより小さかったけれどもある程度の大きさがあった。ラマ僧のなかに衛生条件の悪さや女性がいなかったために同性同士の性交渉が原因で梅毒が蔓延しており、僧らの求めに応じ仁丹などを飲ませた。

ヤーメン廟を出発してしばらくすると遼河上流のウルチムロン河があり、魚が泳いでいた。山岳が迫ってきており、「興安の中央に近づきたるを覚」えた (235 頁)。そこにヤーメン廟より賑やかなゴゴン廟 (祭日のため参拝者があった) があり (写真 8)、またしばらく進むと岩山の山上にあり眺望抜群のデヨケン廟があった (写真 9)。翌日、同廟を出発してウルチムロン河に沿うように進んだ。この日は「一大森林ありて大木の繁茂」

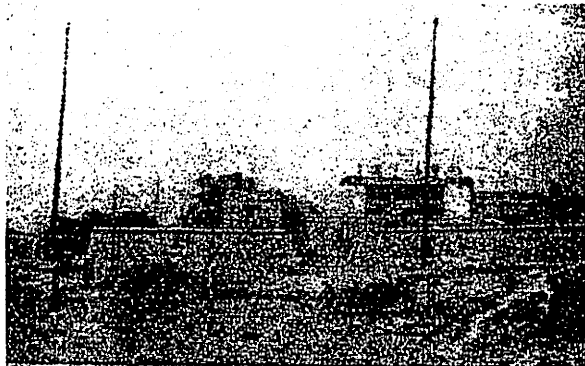


写真 8 ゴゴン廟の奥の院 (第 18 期「興安騎行」より)



写真 9 仙境デヨケン廟 (第 18 期「興安騎行」より)

(236 頁) しているコロスロタイの廟に到着したが、そのラマ僧より大巴林王府までは距離があるうえ、馬賊の出没する山道が続くためここに泊まるように促した。しかし彼らは勇敢にも夜道を進むことにし、山道や真つ暗な高粱畑のなかの道を進むと人家があった。日本人の薄盆三氏の家である。

同氏は「昔の天鬼。今の蒙古産業公司の理事」であり、班員たちは氏から「西瓜」、「冷ビール」、「米の飯」、「煙草五百本」などが提供され「過分の御饗応に預かつた」(以上 238 頁)。翌日、彼に促され西にしばらく行ったところを流れる川で網漁を一緒に行った (写真 10)。しかし「元来蒙古人は川の魚を^(ママ)狙えば雨が降らぬと信じて居る。それで魚を取ることは全く厳禁してあつてこの禁を犯すものは蒙古人でも支那人でも死刑に処してしまふ。処が日本人薄氏のみにはこの魚を取つても好いことになつて居る」そうだ (239 頁)。毎日蒙古人らが雨乞いの行事を行っているが、彼らが網漁を終えて帰ってくると突然大雨が降り出した。

薄氏の会社の本店がある大巴林の街は、「蒙古に於て唯一の大都会であつて全く蒙古人の市街で



写真 10 天鬼と川^(ママ) 狙 (第 18 期「興安騎行」より)

ある。支那人の行商人も居るがその数は至つて少ない。廟は東西に分れ東大廟と西大廟」(238 頁)があるといい、大変繁栄している都市のようである。薄氏の会社は、林西、烏丹城、鄭家屯、奉天等に支店があり、後述する林西では無償で医療サービスを提供する病院も経営している。したがって日本人も多い。さらに、高橋氏の夫人は大巴林で日本語を教えている。ここで案内人の王氏を解雇し、鄭家屯へ帰したが、長旅の苦楽ともに味わってきたゆえに別れは互いに辛かった。

林西へは薄氏らとともに向かった。途中、薄氏が経営する水田があり、「日本人一名と朝鮮人数十名ありてこの水田並に羊の放牧に当つて居る」(240 頁)という。林西では、薄氏の事業に 6 名、病院事業に 2 名の日本人が雇われている。滞在中に再び大雨に降られてしばらく足止めを喰ったが、郊外の立派な天主堂を見学することができた。そこでは「二人のベルギー人が居つて支那人を集めて布教に従事して居る。この一帯の支那人はすべてこの天主教の信徒である。貧民には天主堂より土地を貸与して耕作させるとのことである」(241 頁)といい、教会は貧民救済の役割をも担っていたことがうかがえる。また、林西の戦いで敗れた蒙古人バブチャップの活躍をたたえている。

林西を離れるとまた大雨に見舞われた。「林西より以南はすべて支那人にして蒙古人は少ない。(中略)人家打続きて人馬の往来も少なからず」(242 頁)だという。電柱に沿って歩みを進めるとシラムレンの河岸に出た。川を渡り、一夜の宿に身を寄せた翌日は山道を進んだ。またもや夕立に遭遇したが、この辺りから湯畑氏の体調に異変が生じ始めた。重たい体を引きずりながら天長節の烏丹城に到着した。

この街には「支那人が一萬も居り蒙古人は市街の北の方に居を構へて居る。その数は支那人に及ばぬ。市街は支那町で馬の本場なれば馬具の売買も盛に行は」(243 頁)れているそうだ。牛や羊の皮を扱う市場もある。烏丹城を出発すると、辺

りは「開墾せられ高粱畑と満作で一聞余も高く延びて居」り、「丘には甘草密生して支那人の採集者か盛に往来して居る。蓋し蒙古の甘草はこの烏丹城附近を以て第一とする」(以上 243 頁)。

ある班員は馬から放り出されて気絶したり、馬が泥のなかに首の部分まで埋まってしまう事故が起こるなどの災難に遭ったが、なんとか班員たちは赤峯に到着した。湯畑氏の体調は回復せず、日本赤十字社の伊藤氏の世話になり入院することにした。「大旅行」は原田・實吉の両氏が続行することになり、湯畑氏は 10 月まで療養して錦州、天津を経由して一人上海に帰ったのであった。

以上は湯畑氏による記述であるが、赤峯以降も旅を続けた實吉氏が「その後の旅」と題した文章を寄せているので、以下、簡単にその内容を確認したい。

實吉氏の記録は「熱河はよい所だ」(247 頁)という一言から始まる。それは、「関外野に富み山にむその中に、この小ぢんまりとした都は旅する子に限りない喜びを与える」(247 頁)からである。彼らはここから「民船」を雇い滦河を下ろうとしている。その船頭たちは食料や家に残した家族への土産を買い揃え、莊頭栄子という「滦河と熱河との合流する所、沿線より上航する民船の終点の地」(248 頁)から班員たちを乗せて出発した(写真 11)。彼らが乗った船には船頭 1 名、漕ぎ手 2 名が乗り込み、荷物は粟(他の同行の船 = 5 隻には高粱なども加わる)であった。「之に反し天津滦州方面から来る貨物にして



写真 11 莊頭営子の滦河(第 18 期「興安騎行」より)

上航するものはすべて雑貨である」(248 頁)という。船は日が暮れると適当な岸辺に船をつけ、休息をとりながら翌朝の出発を待つのである。

翌日は夜が明けぬうちに出発、兩岸は「千仞の岩山」(248 頁)である。「八時頃になれば、漕ぐ少年の一人は、櫂を外して竈の火を焚く。飯の支度をするのである」(248 頁)。飯は粟の粥であり、あまりの旨さに筆者の實吉氏は 6 杯を平らげた。兩岸は「高峯絶壁」であり(写真 12)、「沿岸には村も町も特に見る可きものを見ない。山の絶え目の狭い野が深く奥へ入込んで居る所に三三五五村落の散在するのを見るばかり。斯うした所には必ず細い谷川が注いで来る。地図に支流として記されたものも靴の口に達するの深さを有せぬ」(以上 249 頁)という。川の方は急流の灘と穏やかな水面の深い淵と浅瀬を何度も繰り返し、船頭は漕ぎ手と阿吽の呼吸で難所の灘を通過する。石炭を産出する西大窪というところで一夜を明かすと、翌日には長城がみえてきた。その日は肉を商う店がある潘家口という集落で休んだ。

翌 9 月 24 日には関内に入った。途中、撒河橋の街に寄った。ここには兩岸を結ぶ 2 隻の渡し舟があり、ここは「平泉縣(八溝)天津間の唯一交通路に当つて居るのだ」(251 頁)という。この日は興城縣近くに泊まった。また舟から眺める風景も、「口内に入ってから両側の山が著しく低くなり温和しくな」(251 頁)り、平野部に村落も散見されるようになった。25 日の晩は遷安縣城近くに泊まった。翌日、堰を「川の全幅に亘つ



写真 12 滦河下り(第 18 期「興安騎行」より)

て」(252 頁)設置し製粉業を行うために水車を造ろうとしている箇所があった。辛うじて舟を通す小さな水路が岸の近くにあった。その工事主任と言い合っても埒が明かないので、船頭は斧を振るって堰の一部を破壊し、そこを通過したのだった。班員たちも船頭に称赞を送った。日が暮れる頃、滦河鉄橋を渡る汽車を見届け、滦縣に到着した。班員たちは船頭らに別れを告げ、下船した。

27 日は滦縣から天津まで汽車で移動した。天津では弥生館という日本人旅館に投宿することにした。その後、船で大連へと渡り、到着した 10 月 1 日には国勢調査があり「船員に色々聞かれる。巡査も来て調べ」(253 頁)られた。5 日、神戸丸(満鉄)に乗り込み、途中青島を経由して上海に辿り着いたのだった。

V 二つの旅行記からみた 1910 年代の内蒙古東部地域の地域像

Ⅲ・Ⅳ章では第 15 期生と第 18 期生のうち、内蒙古東部地域を巡検した班の「大旅行」記録をみてきた。本章では、筆者がこれまで発表した研究で用いた表の分類項目⁽³⁰⁾にしたがい、彼らがどんなことに関心を抱いたのかをみていくことにしたい。そして、2 編の作品の記述内容から地域情報をピックアップし、この地域における 1910 年代の地域像を描き出してみることにする。

(1) 2 つの班員たちの関心事項

表 1 は第 15 期生、表 2 は第 18 期生の筆者が関心を抱いた事柄を、文中からピックアップしてまとめたものである。これらの表をみながら検討を進めていくことにする。単純にページ数を比較してみれば、第 18 期生の「大旅行」記録の方が分量が多く、両班ともに似通ったコースを巡検しているということを考慮すれば、第 18 期生のそれの方がより詳細に関心事項を記録しているといえる。このことは、筆者が作成した 2 枚の表を見比べても了解される。

表1 第15期「内蒙古班」の関心事（「内蒙古の旅」記述内容より作成）

地名	地形・自然景観	気候・気象	史跡	土着文化	外来文化	都市経済	日本人	その他
青島	葉桜町のポプラ並木、山の傾斜、風光明媚な場所	6月の太陽に照りつけられる、夕方には景色が霞み星の光のみが明るい			ドイツ人	波止場の馬車屋、港の喧騒、市街は静寂、幅10間の赤土道、食道楽・遊び道楽の街		ビスマーク砲台・イルチス砲台、海水浴場、日独戦争
大連	透明度のない海、禿山（郷愁を抱く）	よい天気			ロシアが計画した巨大な波止場、猶太人	緩くカーブして突出した波止場、波止場に並ぶ沢山の汚い倉庫とそこで働く苦力、海辺は月と霞の差、志士名をついた町名（新占領地）、大和ホテルを中心に放射状の都市計画	日本人が多く何もない（故郷を思い出す）	
奉天	北陵に至る道沿いには田園風景が広がる、北陵の老松の森は密林		破壊され荒れ果てた旧城（故宮）と太宗の眠る北陵（城壁は黒レンガを積んで円形）	故宮の宮門で聞こえた胡弓の音も哀れ		奉天駅、広い大道、大きな支那宿、駅付近は新開地、原野を走る幅10間の大道には並木が植わる、洋館・日本家屋、旧都瀋陽は白壁・黒屋根の町、未整備の瀋陽の大通り	書院先聖、奉天新市街は満鉄敷設のためにできた日本人町	書院先聖による歓迎会、班員の正橋氏が赤痢で入院
奉天－長春（滞在迄）		（移動中）真っ暗な車窓に星空、（長春）朝は夏服では涼しすぎる		（移動中）車窓から見える民家の農夫の生活に思いをめぐらす（羨ましい）	（長春）看板には露語、ロシア人、ロシア人の酒場、ロシア人女性が縫物をしている	（長春）満鉄倶楽部（宿）、満鉄長春支庁の物見台、場末の町、辺境の町らしさ、馬車、領事館、朝鮮銀行、「大旅行」準備のため買物	（長春）書院先聖	（移動中）夜汽車に乗って移動、（長春）書院先聖による歓迎会
長春－農安（滞在迄）	（密門出発後）田か道か分らぬ泥濘道、平原に聳える白樺の森、通州河にかかる橋	（密門）北緯44度の太陽、夕立、夜は暗れ、（農安到着前）赤い夕陽		（密門）蒙古犬？の遠吠え	長春以北はロシア東清鉄道、ロシア兵（車内・密門駅）、（農安）街の出口に土塔（朝鮮人によるものか）	（密門）夜は静か、泥濘道、（農安）城壁、領事館と旗竿	（密門）日本人旅館（米・魚・日本酒が出される）	密門までは汽車で移動（薪を燃して走る）、密門からは陸行、（密門出発後）昼食に焼餅、（農安）領事館一室でご馳走
農安－洮南（滞在迄）	（農安出発後）道は一層悪い、果てしない草原と緑の絨毯、まるい地平線、（伏龍泉出発後）草花の咲き乱れる草原、傾斜のある道、（邊昭出発後）山も川もない平原、（杜家店出発後）草原のはるか遠くに見える洮南の城壁と塔、雨に固まった道路	（伏龍泉出発後）雷の音、地平線に淡黒の玉簾のような雲、夕立、突然の砂嵐と降雨、（杜家店出発後）蒙古の砂原を通った熱風、（洮南）烈風豪雨、大尉の自宅の庭が小池になる、市街は洪水、馬車でなければ歩けないほど水に浸かった往来、土崩崩れ障子は破れる、雨季の旅は大変		（六十七抗拉）6～7軒の小村落、熱い炕（高粱を焼く）、南京虫と蠅、（邊昭）人家20軒、（邊昭出発後）所々に人家		（長嶺）縣衙門、（稽町？）平原のなかの鎮店、（開通）仁丹を知らない県知事、（洮南）城門	（洮南）林大尉の御宅	（伏龍泉）煤けた洋灯の下で黄色い飯に白湯をかけて食べる、（長嶺）縣衙門で知事に面会し護兵を依頼、（邊昭）持参の白米を粥にして食べる、（洮南）鄭家屯までの馬車を雇う

（次頁に続く）

洮南 - 鄭家屯 (滞在)	雨後のために徽が沈む、泥濘をこして一面の湖、車台に達するほどの水、馬が立ち往生するほどの泥、淡黄色の草花、(鄭家屯付近) 外遼河、平原に森林がみえる、田畑、遼河	10 時の日差しは帽子を貫くほど、曇りでも太陽光は届く、日毎の雨				(鄭家屯) 医者	(鄭家屯) 書院先輩 3 名、領事館の古谷氏、鄭家屯ホテルの高文氏、警察顧問の坂木氏・俊馬氏	(開通) 旧知の知事や護兵と面会、雨のせいで腹を壊す、(鄭家屯) 出発 1 ヶ月を祝してビールで乾杯、篠岡氏のリタイア
鄭家屯 - 白音他拉 (滞在)	雨上がりの悪路、路傍に馬糞という糞草、(清河付近) 水溜りが多い、清河の増水	(大罕) 清河の氾濫に遭遇、店の門前の水が漸次増水→溝や防止壁をつくる→濁れる水の流れが見える(月がのぼる)→防止壁が破壊され家屋に浸水・荷物を運び出す→土で出来た家が倒壊→修羅の巷の現出→胸まで水に没かる→流れてくる材木で筏を組み夜明けに脱出		(温都爾王府の第二王子宅) 不在、支那語のできる蒙古人の少年が対応(美少年)、(清河) 渡船、増水のため割増運賃、(大罕) 洪水時、男たちは屋根の上で火を焚き神に祈った		(大罕) 安全だとされた新築家屋、土でできた民家がほとんど、院子内には豚がいる(洪水により溺れる)、40 軒ほどの家屋(新築の家と班貝たちがいる店のみ残る→店も倒壊)、(白音他拉手前) 店: 洪水のため麵 1 斤 1 元、(白音他拉) 蒙古王所有の土地を払い下げて市街を造った、市街も清潔、2 日目は支那人の宿屋へ移る	(白音他拉) 日光洋行の添田氏、旅順都督府の調査で訪れていた宮崎氏	(大罕) 自炊の夕食、護照と金袋以外の荷物は倒壊した建物の下敷き、(白音他拉) 添田氏より衣服を貸してもらい、湯屋へ案内してもらい、浴衣に着替えて添田・宮崎氏とビールを飲む(菊水亭?)、馬・驢馬・馬車を雇う
白音他拉 - 開魯 (滞在)	(白音他拉出発後) 西遼河、付近の畑は海のようにになっている(一度街まで戻り再出発)、(モリン廟) 平原の一角、老木もある	(白音他拉出発後) 急な夕立(雨)と降雹、(モリン廟出発後) 断雲が浮かぶ		(白音他拉出発後) 蒙古人の家に避難、(モリン廟) 立派な廟、ラマ僧 1500 人、本堂で毎朝読経、無学文盲の僧が殆ど、応接室には壁紙に仏画を施す、非衛生的、32 歳の支那語を話す仏爺ラマ、夕食は粟飯の粥に羊肉の煮込みで接待、米を食べない仏爺ラマ		(開魯) 東門から入城、東西に貫く大街、薄汚い茶宿、民国 4 年に蒙匪に街を破壊される、護兵多い、ここに駐屯していた張統領に正装して面会したが別人(陸軍将校)、開魯塔		下窪まで宮崎氏と移動、(モリン廟) 奉天の中学を卒業した通訳が仏爺ラマに日本のことを得意顔で話す、(開魯) 親切な知事、夜は高粱酒を 4 人で飲む、遼河氾濫のために荷車がない、驢馬と箱馬を雇う
開魯 - 奈曼王府 (滞在)	(進路全体) 広い奈曼の砂原、日本では見られない美しい蒙古の草花、砂原の所々に草丘と池→放牧風景、(開魯出発後 1 日後より) 地形は砂原に変わる、洪水のため一面は沼地化、狼の出る砂山	(開魯出発 1 日後より) 夏の太陽に照り付けられた焼けるような砂地、(進路全体) 草地で雲漠々の彼方を眺める		(進路全体) 砂原に点々と蒙古包、大道は漢人も少しは住みも宿もある、悍猛な蒙古犬とその恐ろしさ、相貌に似合わぬ親切的な蒙古人、放牧風景、蒙古包で休むのが一番の楽しみ、蒙古人には太古の民の面影があり懐かしい、濃い牛乳、茶、一番に「蒙古犬に注意しろ」という意味の蒙古語を覚えた一犬も静かになる、牧童には浮世の汚れはない、宮崎氏が歌う蒙古の哀調(恋物語)、日没後は牧童の鞭により家畜も家路を急ぐ		(奈曼王府) 大した王城でなく、王と言えども大した尊厳の威は認められず		(進路全体) 驢馬に愛着がわく、迷ったときには故郷が偲ばれる、草原で放牧風景を見ていると心が洗われる、(奈曼王府) 王の親切により大小 4 頭(馬?) と護兵をつけてもらう

(次頁に続く)

奈 曼 王 府 - 赤 峯 (滞在迄)	(下窪到着前) 甘草ばかりだと思 われる野、(海力 王府) 波状の荒 野の丘を背後に 立つ王府、(赤峯 直前) 最後の丘、 (赤峯) 赤峯縣城 は老榆の陰に隠 れて涼しそう	(下窪) 中空の弦 月、(王子廟) 夕 焼けの美しい空、 (海力王府) 出発 時の朝霧		(下窪) 蒙古犬?の 鳴き声の喧噪、(王 子廟) 建平縣知事 に腹が立ち蒙古人 の家に宿を借りる、 (王子廟) 馬賊出沒 のため予定線を南 に変更→海力王府、 (海力王府) 忘れら れない気高く美し い蒙古人、(海力王 府) 道中は馬賊の 話ばかり、水害の ため凶作、流民の 反乱→旅客はとん どなし		(下窪) 土の城壁に 囲まれている、警 察分所、(海力王府) 王府門前の破屋、 門、(赤峯) 領事館、 和店	(下窪) 泰 和 隆 氏と美少 年、(赤 峯) 北條 領事、菅 野 参 謀、 松松 氏、 三 原 氏、 熊本県蒙 古派遣生 諸氏、呉 松 氏 夫 妻、領事 館員2名	(下窪) 宮崎氏との 別れ、氏のお陰で 蒙古の旅が出来た、 (王子廟) 蒙古人を いじめている建平 縣知事(海力王府)、 美少年の王、翌朝 の王の見送りには 感激、(赤峯直前) 西瓜を食べる、(赤 峯) 日本人の親切 に感激、呉松氏よ りビール3ダース の贈り物
赤 峯 - 北 京 (滞在 迄)	(赤峯出発後) 山 岳の起伏を上り 下り、石道が多 く山路急坂、サ プライム (ママ) な景色に接する ことができず残 念→平原が懐か しい、際立った 山は子供のころ 不思議がった鋸 山、(圍城出発後) 山道、河床を渡 る、(熱河) 松が 多く廟の黄・緑 色に映えて美観	(黄姑地) 大雨に 遭遇	(熱河) 宮殿は 半山まで庭園 があり広荘偉 大、松や榆な どの古木の森、 かつては王が 散策した所だ が現在は兵丁 らが遊ぶ、建 築はそのまま だが不潔→か つての栄華を 偲ぶ、(熱河出 発後) 万里の 長城、古北口 では長城が河 口を挟んで兩 断される、か つての英雄に 思いを馳せ、 現在は無用の 長物とする	(圍城出発後) 巡業 の村芝居を鑑賞→ 故郷のなつかしさ、	(熱河出 発後) 西 洋人7人 とすれ違 う、会話、	(黄姑地) 隆化縣城 の所在地、かつて 唐山衛にあったが 民国4年にここに 移る、縣城、(熱河) 知事・護兵とともに 宮城拝観→市民 は何事かと見入る、 (北京) 東門から入 城、人力車の心地 よさ、船板胡同に 宿る、湯屋、城壁 上の散歩道は外人 が多い、交民巷、 宮城の美観、天壇・ 中央公園瑠璃巷	(北 京) 日本公使 館の西田 先輩、亜 細亜通信 社の村田 先輩	(Hartaao) ビール を飲み、苦力と肩 を並べて寝る、(圍 城) 知事を訪問、 小宴、(了山) 炊事、 ビールに舌鼓、(黄 姑地) 湯豆腐にビ ールの食事、縣知事 は堂々としている が日本びいきでは ない、(熱河出発後) 車上に掲げた日章 旗、(長城上) 昼食 にビールと玉老米、 壮大な気分に入る、 この旅を振り返り 支那は自分のもの のようだと考える、 (北京) 饒平名表と 面会
天津							三井の栗 原氏、小 山氏、村 尾氏	天心までは汽車で 移動、栗原氏と夕 食、土間に慣れた ので布団では眠ら れない、ビールを 開け思い出を語る

表 2 第 18 期「内モン古班」の関心事（「興安騎行」記述内容より作成）

地名	地形・自然景観	気候・気象	史跡	土着文化	外来文化	都市経済	日本人	その他
上海 - 大連		夜月						服装はパナマ帽、巻きゲートル、水筒雑袋、甲板上の飲酒
大連						満鉄本社、辻の巡査	寄院先監、先監の竹内氏・大矢氏・中村氏	連日の満鉄調査課での調査（羊毛調査）、同窓接室に置いたヘルメット
奉天			旧宮			満鉄医学堂、城内督軍公署、満鉄公所		市街は張作霖出兵準備で殺気立つ
奉天 - 鄭家屯（滞在）	（移動中）車窓から見えるのは真つ暗な大平原のみ	（鄭家屯）到着時は土砂降りの雨		（鄭家屯）一日二食主義（班員たちは腹が減るので昼寝して過ごす）		（公主嶺）東洋車（運賃を余計に取られる）、満鉄農事試験場（羊の見学）、（鄭家屯）泥濘の道（膝まで没かる）、鄭家屯ホテル	日本人ばかりの満州、（公主嶺）満鉄農事試験場の香村氏、（鄭家屯）野村氏、添田氏、川上久輔氏	（移動中）車内は支那人、朝鮮人、日本人のごちゃまぜ、（鄭家屯）驢馬、支那人の蒙古語通訳を雇う、案内人の王氏（交渉には川上氏が尽力）
鄭家屯 - 洮南（滞在）	（進路全体）至る所に湖が出来ている、（鄭家屯出発後）丘陵、勃兒山を過ぎると大平原、依然道は泥濘、（太平鎮到着前）丘陵、草原、ソーダが多いため路面が白い、（開通出発後）大平原、天地の雄大さ	（進路全体）雨季、（鄭家屯出発後）にわか雨、（哈拉毛頭）月夜、雨後の涼風、（哈拉毛頭出発後）地平線上の怪雲、夕立、平原の家に辿り着いたが一面湖水化、危険を察して衙門台へ急いで逃げる水は腰まである、暴風雨、（開通出発後）颶風に見舞われる、夜月一西の空に稲妻		（鄭家屯 - 洮南）三大強敵の南京虫・昼間の蒼蠅・支那猪の炕（土間の下から熱が送られる）、高粱米の御馳走、昨夜馬賊が襲った場所も平気で通過、（太平鎮到着前）蒙古犬との決闘		（太平鎮）人口 1 千、諸物資の販売、（邊昭）人口 1 千、兵營、園子、（開通縣城）この区間の交通の中心をなす、整然とした市街、城壁、大きな湯屋、縣衙門、（洮南）城壁、東蒙第一の市街、人口 3 万以上、上海のもの変わらない馬車、立派な兵營、馬が安いことで有名	（洮南）神本氏、平馬氏一東の第一線で奮闘	（進路全体）水を恐れる驢馬、（鄭家屯出発後）泥濘のため裸で移動、驢馬も元気がない、（開通縣城）衙門より護照を調べに来る、（洮南到着前）足裏にマメ、洮南に帰る馬車に乗せてもらう、（洮南）有り金で馬や驢馬を購入、乗馬の稽古、草野氏のリタイア
洮南 - 固什寨園（滞在）	（洮南出発後）平坦な土地、地平線上に小さな青い塊を発見→興安嶺の東麓、（水泉兒）ここから山道となる、羊駝たる崎路	（洮南 - 林西）大敵は雨	（洮南出発後）馬に乗り成吉思汗の遠征を思う	（洮南 - 林西）食物がなく馬賊が出没する、（水泉兒）低山の下に二三の人家、（固什寨園）炒米 = 粟粒を油で炒ったもの→硬い（石：粟 = 3：7）、現地民たちは平気で平らげる、		（突泉）蒙匪に市街を全滅させられた、縣城を成しておらず知事も不在、縣設置委員の王氏が支配、城壁も泥を積んであるだけ、狭い土地、人口 1 千（支那人・蒙古人）、（固什寨園）支那人の宿屋、立派な王府は背後が山、前面が平原、5～600 の兵隊、白壁で囲んである、門前には目印の 3 本の木が立ててある		（突泉）知事の厚遇、食物乏しく馬賊出現のためここから先の旅を止められる→決行、護兵を派遣、（固什寨園）王は不在、王妃に馬鹿にされる→怒って護兵を追い返す

（次頁に続く）

赤峯 - 上海 (到着迄・實吉氏・原田氏)	(熱河) 野に富み山に富む間外、滦河、滦河と熱河の合流する所 = 莊頭營子、(滦河) しばらくすると兩岸は千仞の岩山、高峯絶壁、自然崇拝に近い情緒を覚える、谷間に浅い支流が流れている、柳河口村付近の灘、灘・急流・浅瀬を繰り返す、王八石の亀形の巨石、(滦河橋) 関内に入ると山が穏やかになる、平野が広がり集落が点々としている	(滦河) 夜明けの風は冷たい、(滦河橋) 付近で雨に見舞われる、(滦河) 日が暮れると星明かり	(滦河) 長城	(滦河) 民船の船頭 1 名、漕ぎ手 2 名、荷は全て粟、他の船 (6 艘で船団) も粟や高粱が荷、滦州から来る荷は雜貨が荷、日が沈むころ船は着岸して休む、夜が明ける前に出航、朝 8 時頃になると竈の火を焚いて朝食の準備、着岸して粟粥を食べる、岩の間を縫って山羊を追いかける少年、谷間に小集落が点在、灘は船頭と漕ぎ手の阿吽の呼吸で通過、浅瀬に対応した船のつくり、西大窪の石炭、しばらくすると石灰を焼く所がある、潘家口村は長城を壁に利用して家を建てている	(青島) ドイツ人駐營の跡	(熱河) 自然豊かなよいところにある小ぢんまりとした都、民船の船頭は食糧や家族への土産を買う、滦河の船着場 = 莊頭營子 = 民船の終点、舟 40 艘余、熱河から雜穀の到着を待つ、(滦河橋) 関内に入った所、人家 300 以上、2 隻の渡船、平泉縣 - 天津の唯一の交通路に当たっている、船頭たちは買い物をする、ラクダを追う旅人、(遼寧縣) 城壁、(滦河) 滦州駅、(天津) 大きな街は久しぶりで全てが眩しい、(青島) 寄港地、車を雇って市内見物	(天津) 弥生館という邦人旅館	(滦河) 原田氏は粟粥を 6 杯平らげる、潘家口村の店で羊肉を買って食べる、(滦河橋出発後) 毛唐 (外国人) が乗った速い船に追い越される、(遼寧縣) 遼河川を堰き止めて製粉用の水車を建造している工事主任と喧嘩 - 船頭が一部をぶち壊して通過、(滦河) 近づくと汽笛が聞こえるようになる、鉄橋を渡る汽車、ここで下船、泊、滦州駅から汽車に乗り天津へ、(天津) 天津から大連へは船で移動、(大連) 11 月 1 日に到着、国勢調査の日、検査に時間がかかる、大連で船便を待つ、(満鉄神戸丸) 青島經由で上海へ
-----------------------	---	---	---------	--	---------------	---	-----------------	--

まず第 15 期の関心事項であるが、筆者が設定した表の項目のほぼ全てに関心を抱いて「大旅行」記録を執筆していることがうかがえる。なかでも、草原地帯に入ってから当地の「地形・自然景観」や「土着文化」に関心をもっていると、コース上で遭遇した大雨や清河の氾濫などを詳細に記録した「気象・気候」のほか、草原地帯に入る前の都市部などでも積極的に「都市経済」について見聞していることが分かる。また、各所で書院卒業生や現地駐在員などに面会し、支援を得ていることが「日本人」の項目からうかがえる。白音他拉出発後から赤峯到着までは現地の日本人に会うことがなかったようだが、この区間（下窪から赤峯を除く）は旅順都督府委嘱の調査で当地を訪れていた蒙古に詳しい宮崎吉蔵氏が班員に同行し、道中は大変心強かったと述べられている。さらに、「その他」や「土着文化」の項目から了解されるように、地域を支配する王や知事、点々と存在するラマ廟の僧などから歓待を受け、様々な情報とともに護兵、案内人や馬なども得ている。

一方、第 18 期生の「大旅行」記録であるが、

大連から鄭家屯までの区間の「都市経済」の記述は少ないものの、それ以降のルート上では全項目を積極的に見聞し、とくに現地の蒙古人との接触で得られた知識や情報などを記録した「土着文化」や、ルート上の土地条件や土地利用などを記録した「地形・自然景観」は第 15 期のそれ以上に詳細である。前章では紹介しなかったが、班員の原田氏が「蒙古旅行に就いて」という一文を寄せ、この「大旅行」記録の読者や今後この地域を巡検するだろう後輩に向けて内蒙古地域を旅行する際の注意事項や蒙古人の文化と風習などを記していることから分かるように、第 18 期の「内蒙古班」の班員たちはこの地域の風土に深く関心を抱いたことがうかがえる。残念なことに洮南で草野氏、赤峯で湯畑氏が病気のためリタイアしてしまったが、赤峯以降も實吉氏と原田氏は民船を利用して洮河を下って「大旅行」を続けており、民船での生活や「灘」を越える際の船員たちの技術、沿線の景観や都邑の様子などを客観的に描写している。

(2) 1910年代の内蒙古東部の地域像

本節では、文中に登場する地域情報を用いて地図を作成して分析することにより、1910年代の内蒙古東部地域の地域像を明らかにする。なお、この方法は藤田佳久の諸研究⁽³¹⁾で採られているが、本論ではそれらを参考に考察を進めることにする。

まず、コース上の土地条件を把握するために図6(第15期生)と図7(第18期生)を作成した。コース図では主要都市の位置のみを示し、縮尺も小さいために局所的な土地条件は割愛した。

第15期生のコースをみると、長春から開魯まではおおむね草原地帯であり、都市の周辺には水田や畑地もみられる。開魯から赤峯の間は砂漠であり不毛の大地が広がっているが、一部に池と草地がありその周辺で放牧が行われていることがうかがえる。一方、赤峯以南は山岳地帯であることが分かる。このように第15期生による「大旅行」記録を読み解くと、この地域の土地条件には、草原、砂漠、山岳地帯というはっきりとしたコントラストがみられることが分かる。これを執筆した書院生も、赤峯を過ぎると山地のなかを進むこと

になり、これまで苦勞しながら経過してきた平原を懐かしんでいる。

一方、第18期生のコースをみると、洮南周辺には草原が広がっているものの、それを挟むように山地や丘陵が存在していることがうかがえる。また、洮南から林西の間は草地と山地が交互にあり、ドゴエラからアルコルチン王府の間は砂漠も広がっている。同様に、林西や赤峯などの都市周辺には農地利用もみられる。さらに第15期生の記録と同様、赤峯以南は山岳地帯となっていることが了解される。彼らは民船に乗りながら「大旅行」を進めるのだが、赤峯を出発するとその兩岸には切り立った岩山が続いていることが描写されている。ただし、関内に入ると山はなだらかになり、やがて平野部に農地や集落がみられるようになるという。

つぎにルート上の悪路と大洪水について、彼らがそれらに遭遇した場所を図8(第15期生)と図9(第18期生)に示した。

第15期生のコースでは、長春から開魯周辺までの間で悪路に遭遇している。洪水も洮南滞在中と鄭家屯郊外の大罕で経験し、なかでも大罕での

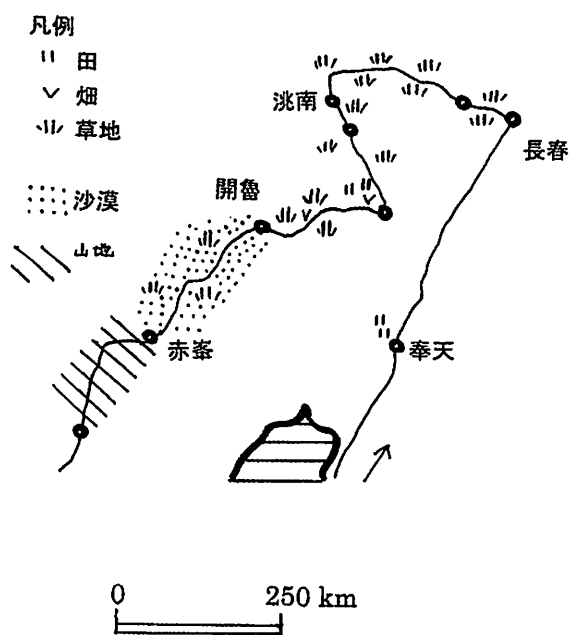


図6 第15期「内蒙古班」コース上の土地条件
(第15期「内蒙古の旅」より作成)

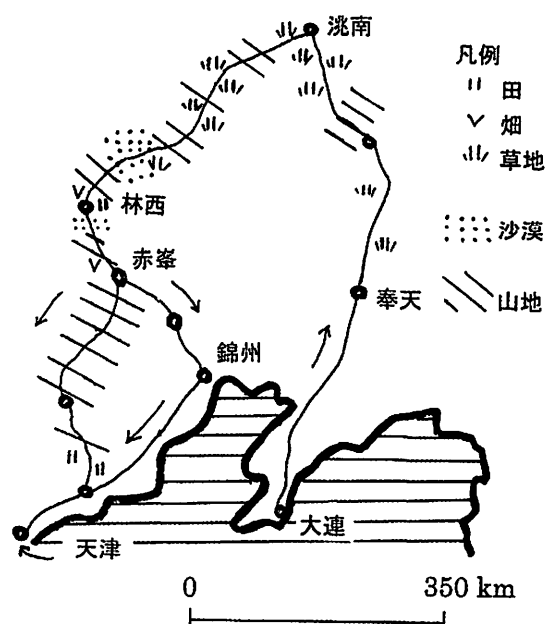


図7 第18期「内蒙古班」コース上の土地条件
(第18期「興安騎行」より作成)

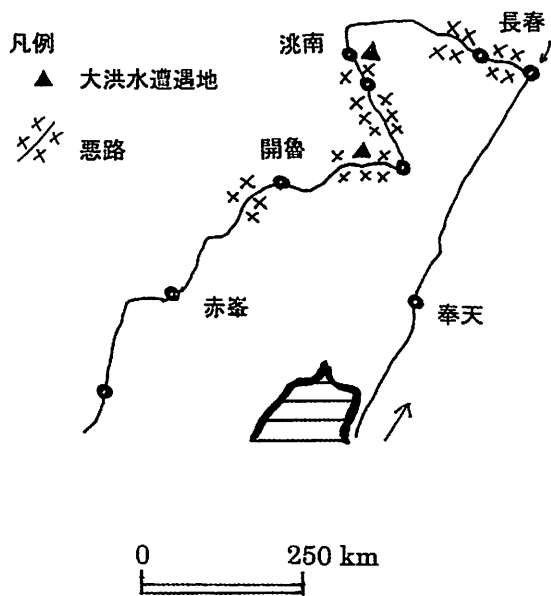


図8 コース上の悪路と大洪水遭遇地の分布
(第15期「内蒙古の旅」より作成)

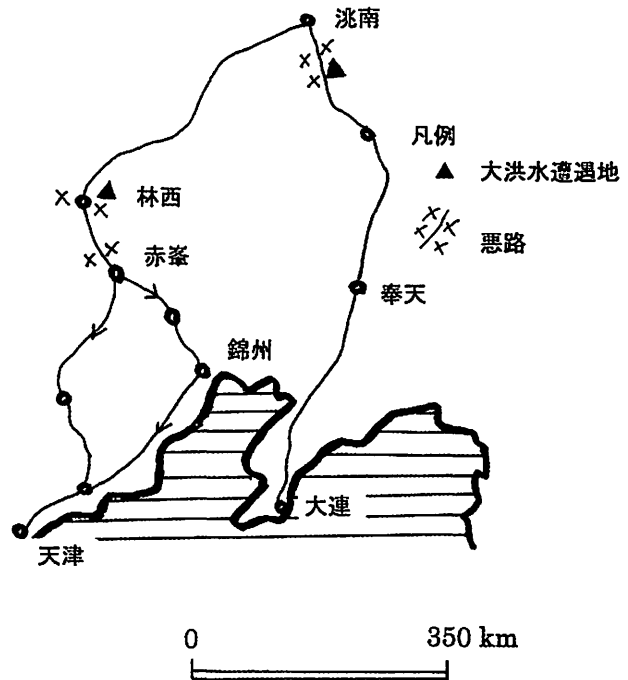


図9 コース上の悪路と大洪水遭遇地の分布
(第18期「興安騎行」より作成)

それは清河が氾濫を起こしたために集落が丸ごと飲み込まれる大災害であった。Ⅳ章でも紹介したとおり、大罕の民家は土壁のものが大半であり、洪水に遭うといとも簡単に倒壊してしまうのである。それだけに、経済的な損失は大きなものであったといえよう。開魯では、遼河の氾濫のために荷車を雇うことができなかったことが述べられている。図6と図8を対比してみると、ちょうど草原地帯でこれらの被害に遭っていることがうかがえる。

第18期生のルートでも鄭家屯から洮南の間で悪路と洪水を経験し、林西では大雨により道路が川に化したことが述べられている。赤峰直前では、班員の原田氏の馬が首まで埋まるほどの泥地を通過しているが、大雨のために一時的に泥地になったのか、そもそも湿地帯なのかは不明である。鄭家屯と洮南の間にある衙門台に到着する前に経験した大雨は、突然の雷鳴とともに降り出し、平原のなかにいたために逃げ場を失った状態になったが、偶然にも建物を見つけ出して避難することが

できた。しかし、水位はますます増加して腰まで水に浸かったために衙門台へ急いで逃げたとある。その一方で、林西手前の大巴林王府では蒙古人や在住の日本人たちが雨乞いをしている様子が紹介されている。この付近は砂漠地帯に近いこともあり雨が他のこの地域より少ないとも考えられるが、高粱畑や一部で水田もみられるように農作物が育つ環境にある。日本人の薄氏が経営する水田もこの年は不作とあるが、この水不足も影響していると考えられる。このように、この地域は大雨が降る一方で日照りも起こりやすく、また一日のうちで晴れと雨を繰り返しているように気候が不安定であるといえる。

このような大雨や悪路の被害に遭遇した理由は、この地域が夏雨地域に属し、1年間の降水量のほとんどが夏季に集中することにある。書院生たちは7月前後に上海の東亜同文書院を出発することになるので、このルートを選ぶ者たちは大雨や洪水に遭遇することになるのである。その一方で、昼夜の気温差は大変大きく、とくに砂漠地帯

を移動する際はことのほか大変だといえる。班員たちの何名かが「大旅行」の途中でリタイアしているが、第18期の湯畑氏は雨に濡れたことにより体調を崩し、早朝の寒気にあたり余計それが悪化したために赤峯に留まらざるを得なくなったように考えられる。現在の旅のように快適な交通手段も少ない時代、旅行者たちは自らの足や馬・ロバに乗って移動するだけにダイレクトに地域の気象条件や気候の影響を受けたのだといえる。なお、ケッペンの気候区分によればこの地区は湿潤大陸性気候（Dfa-b）に属することもあり、冬期の移動も困難を伴う。

続いて、第15期生「内蒙古班」の「旅行経過表」⁽³²⁾の「食物」と「言語」の項を用いて、ルート上の主要都市のそれらの状況をみていくことにしたい。なお「旅行経過表」は、巻末に旅程線上の都市の概況やそこでの宿泊場所、都市と都市の間のルートの様子などがまとめられているものである。

食物に関する情報を地図上に落とした図10をみると、大連、奉天、長春、洮南で米が食べられ、赤峯でも一部流通しているという。このように大都市では米が消費されていることが分かるが、日本人がこの地域に多く入り込んで来ていることも影響しているように考えられる。洮南以南では粟や高粱がおもに消費され、「炒米」という粟粒を油で炒った食品には砂粒も多く入っており、班員たちは食べるのに相当苦勞している様子がうかがえる。奥地でも都市部などでは比較的これらの食糧を手に入れることができたが、そこ以外では馬賊の襲撃とともに食糧不足が懸念され、書院の先輩や現地人から「大旅行」の続行を止めるよう何度も忠告を受けている。

第18期生の原田氏は「蒙古旅行に就いて」のなかで、「昔習を墨守」し、「農耕の危険なる業に従はんよりは伝来の牧畜を業とし」⁽³³⁾していると述べているように、農業を営まない蒙古人は遅れていると考えている。しかし近年発表された既存の

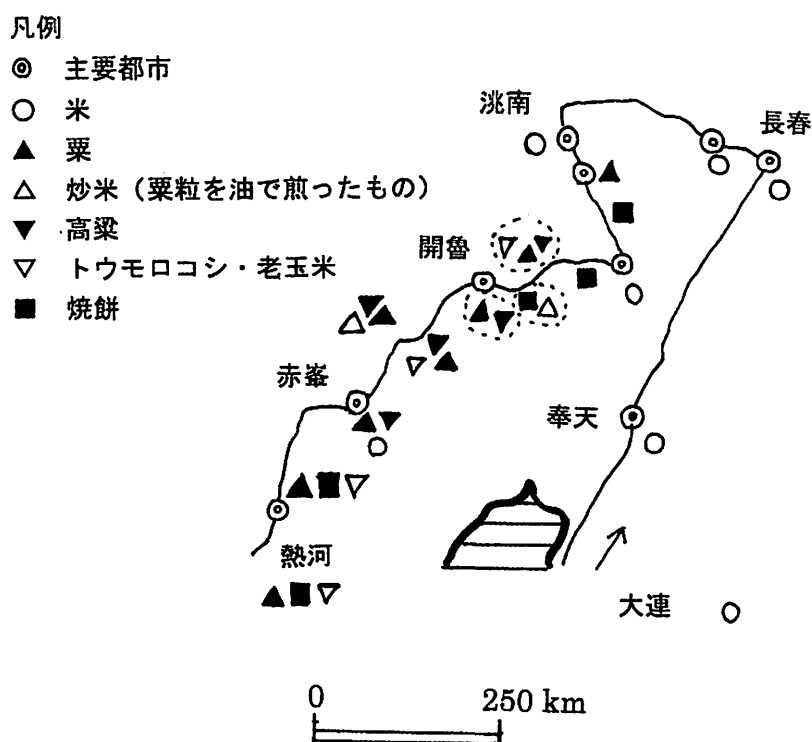


図10 コース上の主要都市における主食の種類
（第15期「内蒙古の旅」巻末の「旅行経過表」より作成）

研究では、栄養学の観点から乳製品を中心に、肉類と小麦粉を使った食品を消費している現在のモンゴル国の遊牧民の合理的な食生活が紹介されたり⁽³⁴⁾、いわゆる外蒙古における牧畜システムは従来指摘されてきたような自然環境への適応のみでなく、社会の変化に対応しているという意味で社会環境にも積極的に適応していることが明らかとなっている⁽³⁵⁾。蒙古人やラマ僧（彼らも蒙古人）たちが、牛などの家畜から得られる乳とその加工品や羊肉などを食している様子は両班の記録にもみられ、雑穀と組み合わせた食事をしていることが述べられている。彼らの生活は地域の風土に適応し、既往研究で指摘されているように栄養学的にみても欠陥がないのであれば、「農耕の危険な業」を無理に行わなくてもよいといえる。なおこの「大旅行」記録に登場する雑穀（牧畜地帯で食べられるもの）は、第 18 期生の「大旅行」記録に登場するような漢族の行商人などから物々交換で手に入れている可能性もある。

他方、都市の周辺などでは高粱が栽培されていることが両班の記録からうかがえる。ホイットルセーらの研究成果を整理した山本正三が作成した農牧業地域の区分図をみると、この地域はほぼ「アジア式畑作農業」地域となっている⁽³⁶⁾。「アジア式畑作農業」地域のうちの寒冷地域では、小麦、綿花、粟、高粱が作られているが、両班の記録からもこのことを確認することができる。東北大平原の大部分は「豊富な腐植質を含む、厚くて優れた団粒構造をもつ「黒い大地」に覆われて」⁽³⁷⁾いることから、土地や土壌の観点からみれば農業に適している地域であるといえるものの、先述したような気候や気象条件に大きく左右されるために安定的な農業は困難であるといえる。

最後に「言語」に関する情報を地図上に落とした図 11 をみると、大連、奉天、長春では日本語が通じるとともに、奉天、長春では満州語も話されていることが分かる。農安では、「満州語土語交り」⁽³⁸⁾であるという。その他の地域の大部分で

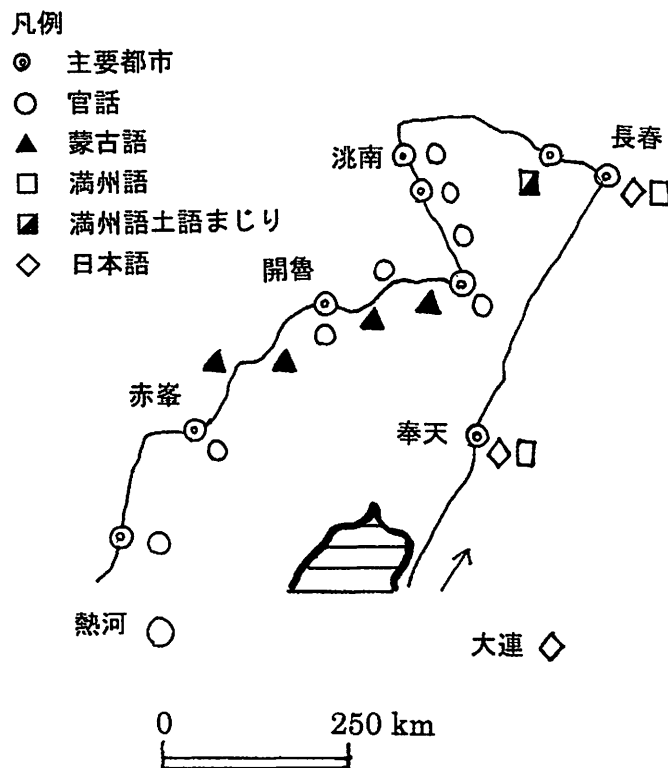


図 11 コース上の主要都市における言語の種類
(第 15 期「内蒙古の旅」巻末の「旅行経過表」より作成)

は官話が通じ、鄭家屯から赤峯の間では蒙古語しか通じない地域も見受けられる。このように、多くの地域で官話が通じ、書院で中国語を勉強した彼らなら現地の人たちとコミュニケーションをとることが可能であるが、「大旅行」記録にも登場するように蒙古語しか通じない地域ではそれを解するガイドを雇う必要があり、蒙古人とのコミュニケーションに苦勞している様子がうかがえる。また別の見方をすれば、満州語や蒙古語が使われる地域に官話が侵入してきているという意味で、この地域の漢化が進んでいると捉えることもできる。

このことに関し、筆者は以前、1908年と1910年に内蒙古の包頭から帰化城（現在のフフホト）周辺を「大旅行」した班の記録を読み、「蒙古人の領域に漢族が入り込み、ラマ教を巧みに利用しながら蒙古人を駆逐し、生活文化を漢化させ、蒙古人からはかつての獐猛さや武勇は感じられなくなった」⁽³⁹⁾と述べたことがあるが、IV章でみたように両班の「大旅行」記録からは漢族が入り込んで来ている様子はうかがえるものの、そのようなことはあまり感じられない。しかし、第18期生の原田氏は「蒙古旅行に就て」のなかで、「蒙古地帯と雖も大体の所は支那人入込み、為に土語に苦しむの必要なく」⁽⁴⁰⁾、「支那人接触の蒙古人は事大猜忌狡猾粗野にして蒙古人の欠点と支那人の欠点とを併せ有する実に嫌ふべきものなり。接触地方の変化の激烈なること甚しく、蒙古は既に蒙古に非ずして支那なり」⁽⁴¹⁾と述べているように、彼らも少なからず漢化を感じ取り、蒙古人の気質の変化を嘆いている。また、ラマ教に関しても、「蒙古人中最精神の腐敗せるものは喇嘛僧」であり、「ラマは教旨を忘れ情落破戒言語に絶す。想ふに蒙古人今日極度の疲弊此の教の致す所なるは論を待たず」⁽⁴²⁾とし、蒙古人を漢化させた諸悪の根源はラマ僧にあると考えている。その墮落が旧習を守り続けることにつながり、それが蒙古人を農業に向かわせない背景だという。これらの記述から

は、漢族がラマ教を駆使して蒙古人を頹廢させたという両者の関係性は読み取れず、むしろそれぞれの要素が個別に働いた結果であると考えることができる。

漢族の流入はまた、蒙古人の生活を困窮させ、そのことがやがて蒙古人の反漢意識の形成につながったとされ、パプチャップ（バボージャブ、1875-1916）のような反漢蜂起の指導者が生まれた⁽⁴³⁾。日本側の一部は彼を利用し、満蒙独立を企てたということも知られている（第二次満蒙独立運動）。第18期生の「大旅行」記録にみられるように、彼は林西の戦いで亡くなったが、班員はその活躍をたたえている。

その他、表1、2の「土着文化」の項を用いて蒙古人の生活文化などをみることもできるが、筆者はそれを詳しく説明する知識を持ち合わせていないので割愛したい。

(3) 小括

本章では、内蒙古東部地域を「大旅行」した第15期生および第18期生「内蒙古班」の記録を用いて、彼らの関心事項を確認したうえで、1910年代におけるこの地域の地域像を描こうとした。彼らは第6期や第8期の書院生たちに比べ、筆者が設定した各項目をくまなく記録しており、なかでも「地形・自然環境」や「気象・気候」、「土着文化」に関しては詳細な記述がみられる。

また、彼らの記述内容から地域情報をピックアップし、数枚の地図を作成してみると地域像がより鮮明に浮かび上がってきた。一般的に東北大平原と呼称されるこの地域は夏雨地域であり、それを利用した畑作農業や、草原地帯では牧畜が行われているが、土地条件に関する情報を拾い出してみると、草原、砂漠、山岳地帯（山地）と明瞭なコントラストをみせ、それぞれに応じた人間活動が行われている。ときに夏季には豪雨に見舞われ、そこに悪路を生み出すが、ルート上の北部地域でそれが顕著にみられる。そのあたりは草原地

帯であり、豪雨に見舞われると一面湖と化してしまうほどである。

奥地では高粱や粟が食べられ、既存の地域区分に似合った農業が行われている。また、草原地帯では牧畜が行われ、環境に調和した生活が営まれている。しかし、夏雨地帯といえども雨乞いの祈願をするほどの干ばつに見舞われる地域もあったり、一日のうちで天気が変わりやすいなど、自然相手の生業を営むには不安定な要素も多い。

言語に関しては広い範囲で官話が通じるものの、蒙古人が多い地域では蒙古語が中心に話されているといえる。満州語や蒙古語を話す地域に官話が入り込んで来ているという意味では漢化が着実に進んでいるといえ、蒙古人に関しては漢化とラマ教の腐敗により彼らの姿は変わりつつあるといえる。そのことはまた、パプチャップのような指導者を生み出す背景にもなったのである。

VI おわりに

本論では 1910 年代に内蒙古東部地域を巡検した第 15 期生および第 18 期生「内蒙古班」が記した「大旅行」記録を用いて、その記述内容を確認するとともに、2つの班員たちがどのような事物に関心を持ったのかを検討してきた。また、文中に記された地域情報をもとに地図を作成し、1910 年代の内蒙古東部地域の地域像を明らかにした。

彼らは出身県の近い者や気の合う者同士でグループを作り、「大旅行」に挑んでいるが、この時期は「大旅行」の拡大期⁽⁴⁴⁾の後半にあたり、多くの地域情報を積極的に記録している。彼らが残した記録を使うことにより、断片的ながらこの地域の地域像を浮かび上がらすことが可能であ

り、マクロ・スケールだけではなくメソ・スケールやミクロ・スケールで地域の姿を確認することができる。議論の小括はIV章の最後にまとめたので詳しくは述べないが、地形条件には草原、砂漠、山地という明瞭なコントラストがあり、そこで生活する人々は気候や気象が不安定ながらも地域に似合った生業を営んでいる。また、蒙古地域では漢化が進行しており、ラマ僧の腐敗とともに彼らの気質を変化させているといえる。

したがって、内蒙古東部地域でも、①変化に富んだ気候やダイナミックな自然、③漢化と蒙古人の気質の変化を認めることができ、一部であるが②ヨーロッパ人宣教師、漢族の商人、日本人が入り込んで来ていること⁽⁴⁵⁾も彼らの「大旅行」記録からうかがえる。

今後は、「拡大期」を脱した 1920 年代に行われた内蒙古の「大旅行」の記録を読みすすめ、当時の地域情報を分析するとともに、1900 年代や 1910 年代のそれと比較していきたい。さらに関連文献も読みすすめながら「大旅行」記録の内容の検討も行い、当時の時代背景や社会の変容などにも注意を払いながら、内蒙古における地域社会システムの変容を描き出していきたい。

【付記】

本論を草するにあたり、ご指導を頂いた藤田佳久教授と、折に触れてアドバイスを頂戴した武井義和氏に感謝する次第である。

なお、一部において差別的な文言がみられるが、資料的価値を考慮してそのまま引用した。しかし、筆者はそのような差別を是認しておらず、早急にそれが解決されることを望んでいる。

文献および注

- (1) ①藤田佳久 (2007):『愛知大学東亜同文書院ブックレット③ 東亜同文書院生が記録した近代中国』、総頁 61、あるむ。②藤田佳久 (2009):「第八十五回午さん交流会 東亜同文書院から愛知大学設立への歩み ～東亜同文書院生の「大旅行」調査を中心に～」、『東三河懇話会会報誌 MIKAWA NAVI』41、16－17 頁、東三河懇話会。
なお、以下の著作は 2000 年までの「大旅行」研究をまとめたものである。
③藤田佳久 (2000):『東亜同文書院 中国大調査旅行の研究』(愛知大学文学会叢書 V)、総頁 349 頁、大明堂。
- (2) 藤田佳久 (2008):「東亜同文書院生の記録からみた 20 世紀初期の満州における農地開発に関する研究」、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』2、225－248 頁。
- (3) 暁敏 (2008):「書院生のフルンボイルにおける調査旅行」、『愛知大学東亜同文書院大学記念センターオープン・リサーチ・センター年報』2、279－284 頁。
- (4) 高木秀和 (2007):「内蒙古で日本人学生は何を見たか - 東亜同文書院第 6 期生が記録した内蒙古と現代の日本人学生が見聞した内モンゴル自治区について -」、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』1、109－124 頁。
- (5) 高木秀和 (2008):「東亜同文書院生による「大旅行誌」を用いた 20 世紀初頭の寧夏・内蒙古の地誌的研究 - 第 8 期生「甘爾額爾多斯班記」をもとに -」、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』2、285－294 頁。
- (6) 藤田佳久 (2005):「中国山西省の土地利用変化 - 100 年前の東亜同文書院生の記録との比較から -」、『2004 年度人口生態環境問題研究会中間報告書 中国における環境問題の現状』、321－334 頁、愛知大学国際中国学研究センター。
- (7) 行政区分図は『走遍中国 内蒙古』の挿図をトレースして作成した。
走遍中国編集部 (2008):『走遍中国 内蒙古』、3 頁、中国旅游出版社。
- (8) 筆者は『研究報』の「リサーチアシスタント紹介」でその旨を述べた。
高木秀和 (2008):「リサーチアシスタント紹介」、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター・ニュースレター 研究報』4、16 頁。
- (9) 第 15 期「内蒙古班」(1918):「内蒙古の旅」、東亜同文書院・編『利渉大川』、209－239 頁＋口絵 5 頁。
オンデマンド版は以下のとおり。
—— (2006):『東亜同文書院大旅行誌 11 利渉大川』、愛知大学・雄松堂出版。
- (10) 第 18 期「内蒙古班」(1921):「興安騎行」、東亜同文書院・編『粵射隴游』、211－264 頁＋口絵 6 頁。
オンデマンド版は以下のとおり。
—— (2006):『東亜同文書院大旅行誌 13 粵射隴游』、愛知大学・雄松堂出版。
- (11) 古川清行 (1955):「第十五期生の回想」、渥友会・編『東亜同文書院大学史』、204－207 頁。
- (12) 前掲 11、205 頁。
- (13) 前掲 11、206 頁。
- (14) 前掲 9、207 頁。
- (15) 渥友会・編 (1982):「第十五期生銘々伝」、『東亜同文書院大学史 - 創立八十周年記念誌-』、450－452 頁。
- (16) 前掲、15。
- (17) 藤野進 (1955):「春秋三十五年 (第十八期生の記録)」、『渥友会・編『東亜同文書院大学史』、212－217 頁。
- (18) 前掲 11、206－207 頁。
- (19) 前掲 17、213 頁。
- (20) 前掲 10、211 頁。
- (21) 前掲 10、206 頁。
- (22) 前掲 10、206 頁、211 頁。
- (23) 渥友会・編 (1982):「第十八期生銘々伝」、『東亜同文書院大学史 - 創立八十周年記念誌-』、462－466 頁。
- (24) 前掲 10、目次。
- (25) 前掲 10、巻末 18－20 頁によると、上海－南京－漢口－石家荘－(中略)－包頭鎮－歸化城－大同－張家口－北京－天津(主要都市のみ記載)となっている。

- (26) 前掲 9、209－239 頁。
- (27) 章立てを確認すると赤峯出発後に「行路難」という項目があるが、写真と記述内容を検討すると、この写真は洮南出発後に写されたものだと考えられる。
- (28) 「白音他来」という表記もあるが、ここでは「拉」に統一する。
- (29) 前掲 10、211－264 頁。
- (30) 前掲 4、120 頁。前掲 5、289・293 頁。なお、前稿では「気象その他」という項目を設定して両者を同一の欄で整理したが、本論では分けて整理する。
- (31) たとえば、前掲 1、2、6 のほかに以下の論考があげられる。
藤田佳久 (1995)：「『中国を歩く』を読み解く」、『東亜同文書院・中国調査旅行記録 第二巻 中国を歩く』、801－841 頁、愛知大学・大明堂。
- (32) 前掲 9、巻末 8－10 頁。なお、第 18 期生のそれはⅡ章 2 節の最後に記した理由により検討することができない。
- (33) 前掲 10、261 頁。
- (34) 石井智美 (2003)：「遊牧－農耕とのかかわり」、原田信男・編『食の文化フォーラム 21 食と大地』、66－87 頁、ドメス出版。
- (35) 小長谷有紀 (2007)：「モンゴル牧畜システムの特徴と変容」、『E-journal GEO』2(1)、34－42 頁、日本地理学会。
- (36) 山本正三作成「農牧業地域」、二宮書店編集部・編 (2000)：『詳解現代地図』、8 頁、二宮書店。
- (37) 高橋満 (1997)：「自然のすがた」、小島晋治ほか・編『中国百科 改訂版』、12 頁、大修館書店。
- (38) 前掲 9、巻末 8 頁の記述による。
- (39) 前掲 4、123 頁および、前掲 5、292 頁。
- (40) 前掲 10、255 頁。
- (41) 前掲 10、258 頁。
- (42) 前掲 10、259 頁。
- (43) 中見立夫 (1990)：「バボージャブ」、国史大辞典編集委員会・編『国史大辞典 第 11 巻』、660－661 頁、吉川弘文館。
- (44) 前掲 31 の藤田佳久 (1995)、803 頁。
- (45) 前掲 39 のまとめを省略して記述。